特集＃1
震災から２年

ここまで進んだ 町の防災対策

平成23年３月11日の記憶。震災は私たちに衝撃を与え、特に沿岸に住む小泊地域の人々にとっては、人ごとではすまされない鮮烈なイメージを刻みつけました。当時、町内は一斉に停電し、電話も不通になったほか、燃料の供給が絶たれ、ガソリンスタンドに多くの人が殺到するなど、その混乱ぶりは記憶に新しいことと思います。

その教訓を活かすため、町はどのような対策を打ってきたのか。そして、これからどのような対策が必要になるのか。住民の皆さんに知ってほしい対策の現状と課題、そしてこれからの展望をまとめました。

No.1 避難所への照明・発電機設置

住民の皆さんが非常時に駆け込む避難所に対し、投光器や発電機の設置を進めました。

災害発生時には、すぐに行政や消防の手が行き届くとは限りません。すぐ逃げ込むであろう身近な避難所に機器を置くことで、初期段階の被害軽減を図ります。

【主立った避難所に照明や発電機を配備】

No.2 庁舎へは非常用電源・常備灯

震災発生当時や、４月に入ってからの2回目の停電時など、役場庁舎は電源確保のため発電機を外で運転し、投光器や基幹のコンピューターなどへ必要な電気器具に電源コードを這わせていくという作業に追われました。

この作業を減らし、非常時にすぐ態勢を整えるため、小屋に発電機を集約させ、庁舎内に非常用電源コンセントと常備灯を設置しました。発電機運転後、すぐに情報収集が行えるようにしています。

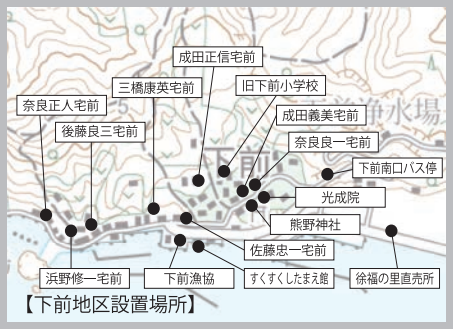
◀庁舎の壁に設置された常備灯（上）と非常用コンセント（下）

No.3 防災訓練の実施

【昨年３月１１日の津波避難訓練】

昨年３月11日に行った「津波避難訓練」のほか、役場職員による防災訓練も昨年に行われました。情報集約の方法や無線機の電波問題など、課題が洗い出されています。

【夜間の停電を想定した職員の訓練】



No. 4 さらに設置を進めた「海抜表示」

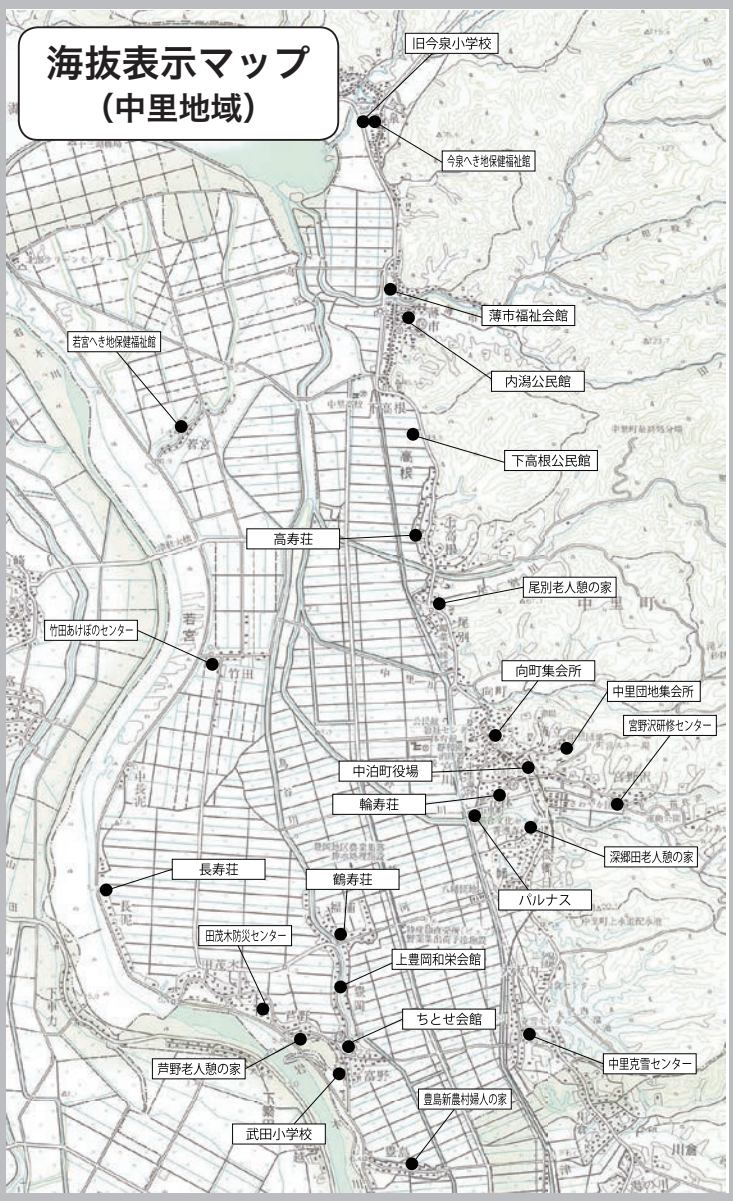
昨年度末から進めていた「海抜表示」ですが、今年度はそれをさらに加速させ、小泊地域には一層の設置を図り、十三湖からの津波や岩木川の氾濫が想定される中里地域にも設置を進めました。

この「海抜表示」は、

- **ふだん自分のいる地区がどのくらいの高さなのかを意識してもらう**
- **町内各地点の海抜表示を見て、どこに逃げればよいか避難の目安にする**
- **土地勘のない人が安全に避難するための目印**

といった役割を担っています。

この表示を見て、自分の今いる場所が災害発生時に安全なのか、そしてどこに逃げればよいのか、ふだんから考えておきましょう。「海抜表示」は、その助けとなるものです。



次なる一手は？

防災対策には、まだまだ先があります。今後、町が行うものとして挙げられるのは、

①防災まちづくり検討会による災害対策の計画策定

②国・県の防災計画見直しを受けた、町防災計画、ハザードマップの見直し着手

③住民の防災意識向上に向けた講演会や訓練などの実施

などが予定されています。

特に沿岸の小泊地域は、津波の被害を受けやすい土地柄であることから、これらの対策を強力に進め、いざというときにきちんと避難できるよう備えたいと考えています。

そして、住民の防災意識をさらに高めていくことで、自分たちの地域を自ら守る「自主防災組織」結成を目指し、さまざまな対策と事業を実施していきます。